

去年の木

新美南吉

青空文庫

いっぼんの木と、いちわの小鳥とはたいへんなかよしでした。小鳥はいちんちその木の枝えだで歌をうたい、木はいちんちじゆう小鳥の歌をきいていました。

けれど寒い冬がちかづいてきたので、小鳥は木からわかれてゆかねばなりませんでした。

「さよなら。また来年きて、歌をきかせてください。」

と木はいいました。

「え。それまで待つてね。」

と、小鳥はいつて、南の方へとんでゆきました。

春がめぐつてきました。野や森から、雪がきえていきました。

小鳥は、なかよしの去年きよねんの木のところへまたかえつていきました。

ところが、これはどうしたことでしょう。木はそこにありませんでした。根っこだけのがこつていました。

「ここに立つてた木は、どこへいったの。」

と小鳥は根っこにききました。

根っこは、

「きこりが斧おのでうちたおして、谷のほうへもっていつちやったよ。」
といいました。

小鳥は谷のほうへとんでいきました。

谷の底そこには大きな工場があつて、木をきる音が、びんびん、としていました。

小鳥は工場の門の上にとまって、

「門さん、わたしのなかよしの木は、どうなつたか知りませんか。」
とききました。

門は、

「木なら、工場の中でこまかくきりきざまれて、マッチになつてあつちの村へ売られてい
つたよ。」

といいました。

小鳥は村のほうへとんでいきました。

ランプのそばに女の子がいました。

そこで小鳥は、

「もしもし、マッチをごぞんじありませんか。」

とききました。

すると女の子は、

「マツチはもえてしまいました。けれどマツチのともした火が、まだこのランプにともつています。」

といいました。

小鳥は、ランプの火をじつとみつめておりました。

それから、きよねん去年の歌をうたつて火にきかせてやりました。火はゆらゆらとゆらめいて、ここからよろこんでいるようにみえました。

歌をうたつてしまうと、小鳥はまたじつとランプの火をみていました。それから、どこかへとんでいってしまいました。

青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

去年の木

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>